様式１（小・中）

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和２年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	鳥栖市立鳥栖北小学校

1　前年度 評価結果の概要	・すべての評価項目において、おおむね達成以上の成果を得ることができた。 ・学力向上対策、生徒指導、特別支援教育等、校内で組織的に取組を進めることができた。今後はそれぞれの指導が、児童の成長において目に見える成果が出るようにしていく必要がある。 ・7月に行った中間評価アンケートと年度末に行った最終評価アンケートで、学校外からの評価に伸びが見られた。それらに甘んじることなく、課題に対する具体的な取組を進め、更なる成果が出るよう取組を進めていく必要がある。 ・働き方改革に向けては、業務の精選、勤務時間の意識化を行い、子供と向き合う時間を確保するための働き方改革につなげていきたい。
2　学校教育目標	豊かな心を持ち、個性に富み、たくましく生きる児童の育成
3　本年度の重点目標	①子どもの心を鍛える。 ②子どもの学びを鍛える。 ③子どもの体を鍛える。 ④教師力を磨く。 ⑤共に育てる。

4　重点取組内容・成果指標　　中間評価　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・教職員間でマイプランを共有するとともに、校内研修等により取組の促進を図る。	B	・コロナ禍による様々な制限があり、学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標の達成（教師80%以上）にはやや届いていない。校内研修等により、厳しい現状を想定したマイプランを作成し、取組の促進を図っていきたい。	B	・マイプランの成果指標をコロナ禍に合わせて途中で柔軟に捉えて変更することを可としたことで、80%以上達成できた。コロナ禍で出張等の校外勤務が減り、学年での調整等の時間が増えたことも要因としてあげられる。12月の4・5・6年生対象の佐賀県学習状況調査の結果は8教科中7教科で県平均を上回っていた。本校以上に厳しい状況で学習している学校の存在を考えると安易に安心はできないと考える。	B	・目標達成に向けて取り組まれている先生方の意欲が伝わってきた。 ・年度当初は、新型コロナウイルス感染予防のため、臨時休業となり、影響を心配した。今後も、児童一人一人に細かい目配りをお願いしたい。
	○読書活動の推進	○読書量平均一人70冊以上（低学年）、 60冊以上（中学年）、 50冊以上（高学年）	・図書委員会による年2回の図書館祭りや各学年のおすすめの本を提示するなど児童への啓発活動を進める。 ・読書週間にファミリー読書を推奨し、読書の習慣化を図る。	B	・図書委員会では、児童がおすすめの本を掲示したり、鳥栖市立図書館のおすすめの本を掲示するなど啓発活動を行った。しかしながら「本をたくさん読んでいる」と答えた児童は80%に満たなかった。 ・家庭用のアンケートでは「読書好きの子どもになるように努力している」と答えた保護者は52%にとどまったことから、読書週間のファミリー読書に力を入れていきたい。	B	・低学年、中学年の半分のクラスは平均で、貸し出し目標である70冊、60冊を大きく超えている。しかしながら、高学年はどのクラスも目標の50冊には届かなかった。要因として、図書室で借りられる時間が制限され、ほとんどのクラスが週に1～2回程度しか図書室に行けなかったことが考えられる。 ・11月中旬に校内で、図書館祭りを2週間行い、読書の啓発を行った。また、同時期にファミリー読書として家庭への啓発を行ったが、「読書好きの子どもになるように努力している」と答えた保護者は52%にとどまった。	B	・保護者の支援が大きく影響すると思われる。地域からも、保護者への啓発を支援していきたい。 ・保護者アンケートの結果からも、家庭での読書の時間が少ないようだ。親子読書タイムや、保護者が小さい頃の愛読書を紹介してはどうか。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童生徒70%以上	・道徳科の授業づくりに関する校内研修等の実施を行う。 ・友達のよさ見つけの実践を行う。 ・友達を大切にする実践（「くん」や「さん」をつけて友達を大切にする等）を行う。	A	・学校評価アンケートの「友達のいいところを知っている」では90パーセント以上の児童が「あてはまる・だいたいあてはまる」と回答している。また、「友達の名前に『くん』や『さん』をつけて呼んでいる」では、85%の児童が「あてはまる・だいたいあてはまる」と回答している。 ・今後は「友達のよさ見つけ」の実践を交流し合うことで、より友達との関わりを深めていくことができるようにする。また、名前の呼び方については、今後も学校全体で取り組んでいく。	A	・学校評価アンケートの「友達のいいところを知っている」の項目で「あてはまる・だいたいあてはまる」と回答した児童は、前期・後期ともに91%であった。関わりを深める場やよさを交流する場を意図的に設定することで、年間を通して多くの児童が友達のよさに目を向けることができたと考える。 ・学校評価アンケートの「友達の名前に『くん』や『さん』をつけて呼んでいる」の項目で「あてはまる・だいたいあてはまる」と回答した児童は、前期85%に対し後期は79%であった。名前の呼び方については、友達に馴れることで敬称を使わない児童が増えていると思われる。年間を通して学年全体で取り組むことが必要である。	A	・細やかな指導に感謝する。 ・友達の良いところを、これからの自分の生活の中でも反映できるような子供たちに育ってほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教員90%以上	・毎月10日の「鳥栖市いじめ・命を考える日」になかよしアンケートを行い、即日に確認するとともに、チームで迅速に対応する。 ・毎週水曜日の「生徒指導打ち合わせ」において、情報交換と情報の共有を行い、指導や支援の方法について全職員で共通理解を図る。	B	・なかよしアンケートは、6月・7月に実施した。各担任で内容を確認し、記載されている事項について適切に指導を行った。 ・生徒指導打ち合わせでは、運動場の使い方、支援を要する児童へ指導の方法など多岐にわたって話合い、共通理解を図り、共通した指導を行うことができた。	B	・毎月10日のなかよしアンケートでは、12月までの集計で454件の事案（複数回答）を発見することができた。それぞれに事案について記載された内容を確認し、いじめの早期発見と適切な指導を行うことができた。また、学校評価アンケートの「学校はいじめを絶対に許さない指導を子供たちに行っている」の項目で「あてはまる・だいたいあてはまる」と答えた保護者の割合は約90%であった。 ・毎週1回生徒指導打合せを行い、児童の生活の様子について共通理解を図り、児童へ共通した指導や支援を行うことができた。学校評価アンケート「いじめについて組織的な対応をしている」の項目で「あてはまる・だいたいあてはまる」と答えた職員の割合は約98%であった。	B	・組織的な対応、継続的な指導・支援に感謝する。 ・事案に対して対応するメンバーや対策を検討する会議等が組織されていることで、様々な事案にも早期に対応・解決できると思う。
	◎自らの夢や目標に実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の実施	◎夢や目標の実現に向けて、努力する気持ちがあると答える児童80%以上	・児童が夢や目標を持てるような授業実践を行ったり、それに関する校内研修を実施したりする。 ・体験活動を行う際には、児童に見通しを持たせ、活動後には必ず振り返りを行い、自己の成長に気付く場を設定する。	B	・学校評価アンケートで、「夢や目標にむかってがんばろうと思っている」（児童）について、「児童に目標をもたせて取り組ませるとともに振り返りを行わせている」（教師）について、共に「あてはまる・だいたいあてはまる」が90%を超えている。 ・2学期以降は、授業実践を通してより実感を持たせたり、家庭に情報発信をすることによってより高まると考える。	A	・学校評価アンケートで、「夢や目標にむかってがんばろうと思っている」（児童）について、「あてはまる・だいたいあてはまる」が90%を超え、「児童に目標をもたせて取り組ませるとともに振り返りを行わせている」（教師）については、100%という結果になっている。 ・体験活動を行う際、活動前後に児童にめあてを持ったり、活動後に振り返りをしたりする時間を設定することで、自分の頑張りを実感し、成長に気付くことができたと考える。また、それをファイルに綴じて見える化することで、自己肯定感が高まると考えられる。	A	・目標に向かって頑張っている児童の生き生きとした姿には、頼もしいものを感じている。
●健康・体つくり	❶「望ましい生活習慣の形成」 ❷「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」 ❸「安全に関する資質・能力の育成」	❶早寝早起きをしている児童90%以上 ❷朝食の喫食率90%以上 ❸防犯ブザーの所持率90%以上	・生活リズムアップ週間を実施し、早寝・早起き・朝ごはんの習慣を意識させる。 ・防犯ブザー点検を各学級で行い、所持する必要性について声掛けを行う。	B	・生活リズムアップ週間を実施し、望ましい生活習慣について意識化させることができた。 ・防犯ブザー点検については、コロナウイルスの影響で課業日が少なく、実施できなかった。2学期に取り組む予定である。	B	・望ましい生活習慣を意識させたが、早寝早起きをしていると答えた児童は81%程度だった。朝食は96%の児童が食べているとの回答だった。家庭への働きかけが大切と思われる。 ・防犯ブザーの所持率は，全体で97．3%の結果になっている。各担任から防犯ブザーの必要性について話をするとともに，通信などで家庭にも呼びかけた。来年度も90%以上を目指していく。	B	・継続的な指導・支援に感謝する。 ・家庭への働きかけに合わせて、地域でもできることについて協力していきたい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校時間の上限を遵守する。	・業務記録による勤務時間の意識化を図る。 ・定時退勤日を設定し確実に実行する。 ・業務の精選を行う。	B	・定時退勤日は確実に実行することができた。業務記録により勤務時間の意識化が図られているが、更なる改善の余地はある。 ・業務改善のアイデアを募集し、可能な部分から順次取り入れ改善を行っていく予定である。	A	・学校評価アンケート（職員）で「勤務時間や定時退勤日を意識し、計画的に業務を行っている」について、「あてはまる・だいたいあてはまる」が98%となり、中間評価より7%改善した。 ・業務の精選については、行事の中身や校時表の見直しを行い、できるところから実行に移していった。また、個人内の業務改善についても、それぞれのアイデアを交流し、時間を生み出す工夫をした。	A	・先生方の活力は、児童に大きく影響する。休める時は休んでほしい。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、消毒など、新たな仕事が増えているのではないだろうか。感染者を出さないための先生方のご苦労に感謝する。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
★小中一貫教育の充実	★教科「日本語」の実践充実	★保護者・地域等に対する教科「日本語」の授業公開学級率50%以上 ★保護者等に対する教科「日本語」に係る情報を年間3回以上伝えた学級率80%以上	・国語科と教科「日本語」の関連性を整理して年間計画に明記し、計画的に授業を公開する。 ・教科「日本語」の実践内容について、学年通信で学期に1回紹介する。 ・児童の取り組みや感想等を、学級通信等で学期に1回以上伝える。	C	・教科「日本語」に関するアンケート「授業を計画的に行い、その取組や感想をおたより等で伝えている」では、「あてはまる・だいたいあてはまる」の教員は60%程度にとどまっている。 ・2学期は、授業公開をするクラスと通信で紹介するクラスを明確にして取り組む。 ・各学年の教科「日本語」担当が中心となって、授業の計画的な取り組み、情報発信をする。	B	・本年度の参観日が1回（1時間）のみであった。その状況において、35%の学級が教科「日本語」の授業公開を行うことができた。 ・保護者アンケートで「学校は、教科「日本語」の学習の様子をおたより等で伝えている」について、「あてはまる・だいたいあてはまる」が73%であった。今後も、学年通信や学級通信で情報を発信する計画を立てている。	B	・国語科とは別に教科「日本語」の指導を実践されていることは素晴らしいことである。継続してほしい。
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性や意識が向上した教員80%以上	・障害についての理解を図る研修や通常学級の中での特別支援教育について研修会を行い、専門性の向上を図る。 ・個別の教育支援計画と個別の教育指導計画の100%作成と活用を図る。 ・障害の特性に応じた交流及び共同教育の推進を行う。	A	・発達障害や言語障害に関する研修会を全職員向けに実施した。また、特学の新任者に対する研修会を夏休みに実施した。 ・1年生を除く全学年での作成率は100%になった。 ・通常学級への交流及び共同教育は、全員が実施できている。障害の特性や状態に応じて時間割を設定し、個に応じた交流ができている。	A	・学校評価アンケートの「特別支援教育の視点に立って児童の指導にあたったり、教師の専門性を高めようとしている」の項目で、90%以上が「あてはまる・だいたいあてはまる」の回答であった。特別支援的な対応や配慮への必要性の高さが分かる結果であり、引き続き教師のニーズに応じた研修を行う必要があると感じた。 ・交流及び共同的な教育活動については、保護者との合意形成を行い、交流学級担任の理解・協力のもとに円滑に実施することができている。	A	・児童の実態が多様化する中、学校全体で取り組まれていることに感謝する。

●・・・県共通　★・・・鳥栖市共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・本年度からコミュニティ・スクールとなり、学校の教育目標を達成するために、保護者や地域の力も借りることができ、大変心強かった。今後、更に効果的な取組となるよう連携の輪を広げていきたい。 ・新型コロナウイルス感染症の予防のため、活動が制限されたり、中止せざるを得ないようなことがあり、なかなか当初の計画どおりに取組を進められない部分があった。目標達成が困難な場合の柔軟な軌道修正の必要性と、修正した目標に対する具体的な取組の必要性が重要であると感じた。 ・次年度は、本年度達成できなかった項目や課題に対して、少しでも改善できるよう具体的な対策を立てていく必要がある。